

夫^{それおもんみ}以れば末法流布の時、生を此の土に受け此の経を信ぜん人は、如来の在世より猶多怨嫉の難甚だしかるべしと見えて候なり。其の故は在世は能化の主は仏なり、弟子又大菩薩・阿羅漢なり。人天・四衆・八部・人非人等なりといへども、調機調養^{じょうきじょうよう}して法華経を聞かしめ給ふ、尚猶多怨嫉^{なお}なり。何に況んや末法今時は教機時刻^{とうらい}当来すといへども其の師を尋ぬれば凡師なり。弟子又鬪諍堅固・白法隱没・三毒強盛の悪人等なり。故に善師をば遠離し悪師には親近^{しんこん}す。其上真実の法華経の如説修行の行者の弟子檀那とならんには三類の敵人決定せり。されば此の経を聴聞し始めん日より思ひ定むべし、況滅度後の大難の三類甚だしかるべしと。然るに我が弟子等の中にも兼ねて聴聞せしかども、大小の難来たる時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ。又兼ねて申さざりけるか、経文を先として猶多怨嫉況滅度後と朝夕教へし事は是なり。予が或は所を追はれ或は疵^{きず}を蒙り、或は兩度の御勘気を蒙りて遠国に流罪せらるゝを見聞すとも、今始めて驚くべきに非ざるものをや。

問うて云はく、如説修行の行者は現世安穩なるべし、何が故ぞ三類の強敵盛んなるや。答へて云はく、釈尊は法華経の御為に今度九横の大難に値ひ給ふ。過去の不輕菩薩は法華経の故に杖木瓦石を蒙り、竺の道生は蘇山に流され、法道三蔵は面に火印をあてられ、師子尊者は頭^{こうべ}をはねられ、天台大師は南三北七にあだまれ、伝教大師は六宗にくまられ給へり。此等の仏・菩薩・大聖等は法華経の行者として而も大難にあひ給へり。此等の人々を如説修行の人と云はずんば、いづくにか如説修行の人を尋ねん。然るに今の世は鬪諍堅固・白法隱没なる上、悪国・悪王・悪臣・悪民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば、国土に悪鬼乱れ入りて三災七難盛んに起これり。かゝる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生まれけるこそ時の不祥なれども、法王の宣旨背きがたければ経文に任せて権実二教のいくさを起こし、忍辱の鎧^{よろい}を著て妙教の劍をひっさげ、一部八卷の肝心妙法五字のはたを指し上げて、未顕真実の弓をはり、正直捨権の箭^やをはげて、大白牛車に打ち乗って権門をかつぱと破り、かしこへをしかけこゝへをしよせ、念仏・真言・禅・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに、或はにげ、或はひきしりぞき、或は生け取りにせられし者は我が弟子となる。或はせめ返し、せめをとしすれども、敵は多勢なり、法王の一人は無勢なり、今に至るまで軍やむ事なし。法華折伏破権門理の金言なれば、終に権教権門の輩^繁を一人もなくせめをとして法王の家人となし、天下万民諸乗一仏乗と成りて妙法独りはむ昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨土くれをくだかず、代はぎのうの世となりて、今生には不祥の災難を払ひて長生の術を得、人法共に不老不死の理^{ことわり}顯はれん時を各々御らんぜよ、現世安穩の証文疑ひ有るべからざる者なり。

問うて云はく、如説修行の行者と申し候は何様に信ずるを申し候べきや。答へて云は

く、当世日本国中の諸人一同に如説修行の人と申し候は、諸乗一仏乗と開会しぬれば、何れの法も皆法華經にして勝劣淺深ある事なし。念仏を申すも、真言を持つも、禪を修行するも、総じて一切の諸經並びに仏菩薩の御名を持ちて唱ふるも、皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云はれ候なり等云云。予が云はく、然らず。所詮仏法を修行せんには人の言を用ふべからず、只仰いで仏の金言をまぼるべきなり。我等が本師釈迦如来、初成道の始めより法華を説かんと申し食ししかども、衆生の機根未熟なりしかば、先づ權教たる方便を四十余年が間説きて、後に真実たる法華經を説かせ給ひしなり。此の經の序分無量義經にして、權実二教のはうじを指して方便と真実を分け給へり。所謂「以方便力、四十余年、未顯真実」是なり。大莊嚴等の八万の大士、施權・開權・廢權等のいはれを得意分け給ひて、領解して言はく、法華已前の歴劫修行等の諸經をば「終不得成、無上菩提」と申しきり給ひぬ。然して後、正宗の法華に至って「世尊法久後、要當説真実」と説き給ひしを始めとして「無二亦無三、除仏方便説」「正直捨方便」「乃至不受余經一偈」といましめ給へり。是より已後は「唯一仏乗」の妙法のみ一切衆生を仏に成す大法にて、法華經より外の諸經は一分の得益もあるまじきを、末代の学者、何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思ひて、或は真言、或は念仏、或は禪宗・三論・法相・俱舍・成実・律等の諸宗諸經を取り取りに信ずるなり。是くの如き人をば「若人不信毀謗此經、即斷一切世間仏種、乃至其人命終入阿鼻獄」と定め給へり。此等の明鏡を本として一分もたがえず、唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり。

難じて云はく、左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はゞこそ、只一經に限りて經文の如く五種の修行をこらし、安樂行品の如く修行せんは如説修行の者とは云はれ候まじきか如何。答へて云はく、凡そ仏法を修行せん者は撰折二門を知るべきなり。一切の經論此の二を出でざるなり。されば国中の諸学者等、仏法をあらあまなぶと云へども、時刻相應の道理を知らず。四節四季取り取りに替はれり。夏はあたゝかに冬はつめたく、春は花さき秋は菓成る。春種子を下して秋菓を取るべし。秋種子を下して春菓実を取らん豈取らるべけんや。極寒の時は厚き衣は用なり、極熱の夏はなにかせん。涼風は夏の用なり、冬はなにかせん。仏法も亦是くの如し。小乗の法流布して得益あるべき時もあり、權大乘の流布して得益あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり。然るに正像二千年は小乗・權大乘の流布の時なり。末法の始めの五百歳には純円一実の法華經のみ広宣流布の時なり。此の時は鬪諍堅固・白法隱没の時と定めて權実雜乱の砌なり。敵有る時は刀杖弓箭を持つべし、敵無き時は弓箭兵杖なにかせん。今の時は權教即実教の敵と成る。一乗流布の代の時は權教有つて敵と成る。まぎらはしくば実教より之を責むべし。是を撰折の修行の中には法華折伏と申すなり。天台云はく「法華折伏破權門理」と、良に故あるかな。然るに撰受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば、冬種子を下して益を求むる者にあらずや。鶏の曉に鳴くは用なり、よいに鳴くは物怪なり。權実雜乱の時、法華經の御敵を責めずして山林に閉ち籠

りて撰受の修行をせんは、豈法華經修行の時を失ふべき物怪にあらずや。されば末法今の時、法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へる。誰人にてても坐せ、諸經は無得道墮地獄の根源、法華經独り成仏の法なりと音も惜しまずよばはり給ひて、諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ。三類の強敵来たらん事は疑ひなし。

本師釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年。今日蓮は二十余年の間権理を破るに其の間の大難数を知らず。仏の九横の大難に及ぶか及ばざるかは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし。彼は只悪口怨嫉計りなり。是は兩度の御勘気、遠国の流罪、竜口の頸の座、頭の疵等、其の外悪口せられ、弟子等を流罪せられ、籠に入れられ、檀那の所領を取られ、御内を出だされし。是等の大難には竜樹・天台・伝教も争でか及び給ふべき。されば如説修行の法華經の行者には三類の強敵の杖定んで有るべしと知り給へ。

されば釈尊御入滅の後二千余年が間に、如説修行の行人は釈尊・天台・伝教の三人はさてをきぬ。末法に入つては日蓮並びに弟子檀那等是なり。我等を如説修行の者といはずば、釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず。提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覺・智証・善導・法然・良觀房等は即ち法華經の行者と云はれ候べきか、釈迦如来・天台・伝教・日蓮並びに弟子檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべきか。法華經は方便權教と云はれ、念仏等の諸經は還つて法華經となるべきか。東は西となり、西は東となるとも、大地所持の草木共に飛び上りて天となり、天の日月星宿は共に落ち下りて大地となるためしはありと云ふとも、いかでか此の理あるべき。

哀れなるかな、今日本国の万人、日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められて大苦に値ふを見て悦び咲ふとも、昨日は人の上、今日は身の上なれば、日蓮並びに弟子檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし。只今仏果に叶ひて寂光の本土に居住して自受法樂せむ時、汝等が阿鼻大城の底に沈み大苦に値はん時、我等何計りむざんと思はんずらん。汝等何計りうらやましく思はんずらん。一期過ぎなむ事は程無ければ、いかに強敵重なるとも、ゆめゆめ退する心なかれ、恐るゝ心なかれ。縦ひ頸をばのこぎりにて引き切り、どうをばひしほこを以てつゝき、足にはほだしを打ってきりを以てもむとも、命のかよはんきは、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死にゝしぬるならば、釈迦・多宝・十方の諸仏、靈山会上にして御契りの約束なれば、須臾の程に飛び来たりて手を取りてかたに引き懸けて靈山へはしり給はゞ、二聖・二天・十羅刹女・受持者をうごの諸天善神は、天蓋を指し幡を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給ふべきなり。あらうれしや、あらうれしや。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

文永十年癸酉五月 日

日 蓮 花 押

此の書御身を離さず常に御覽有るべく候